

## ウジェーヌ・アジェの写真による 19 世紀末から 20 世紀初頭のパリにおけるピトレスクに関する研究 ソルボンヌ地区シリーズについての景観特性の分析を通じて

Study on the Concept of Pittoresque in Paris by the Photos of Eugène Atget from the End of the Nineteenth to the Twentieth Century

- The Analyze of the Characters of the Landscapes of the Pictures in the Series of the Sorbonne Area -

江口 久美  
Kumi Eguchi

This study aims to analyze concept of the “pittoresque” in French by revealing the characters of the landscape took in the photos of Old Paris Series by Eugène Atget from the end of the nineteenth to the twentieth century. As a result I clarified that the concept of the pittoresque by Atget was totally against the radical urban planning by Haussmann. Atget preferred the winding and the irregular streets, which contrasted to the Haussmannisme urban planning where the perspectives were important. And he also thought that the ambience of the ordinary life in the area was important and took photos of the details and the unique buildings.

Eugène Atget, Pittoresque, Sorbonne area

ウジェーヌ・アジェ、ピトレスク、ソルボンヌ地区

### 1. はじめに

#### (1-1) 研究の背景と目的

1853 年、ジョルジュ＝ウジェーヌ・オスマン (Georges-Eugène Haussmann) がセーヌ県知事に任命されると、「都市の構造化」を目的としてパリ改造を進めた<sup>(1)</sup>。その際、モニュメントにパースペクティブを与える規則性、直線、幾何学性が重視された<sup>(1)</sup>。パリ大改造から影響を受けたため 1853 年には国内で、1875 年からはヨーロッパにおいて、オスマン化 (haussmannisation) が見られた<sup>(2)</sup>。

一方、フランス語のピトレスク (pittoresque) は、絵画に関するイタリア語 pittoresco から導入され、現代では「注意を引き、絵に描きたいような、固有の様相による魅力を有する」<sup>(3)</sup> という意味を有する<sup>(2)</sup>。WÖLFFLIN(1888)によれば、「ピトレスクな様式」は、動き、塊、光と影、不確かさ、ゆがみ、不規則性、不均斉性の性質を有したが<sup>(3)</sup>、バロックの時代には形状の不変の特徴として対照的に現れた<sup>(4)(4)</sup>。

ヨーロッパ各国は、オスマニズムへの反動からピトレスクを指向するようになった。伝播したオスマニズムによる厳格な構成に疲弊したため、オーストリアの都市計画家カミロ・ジッテ (Camillo SITTE :1843-1903) は、パースペクティブを重視するオスマニズムに対する揺り戻しとして、ピトレスクな不規則で、幾何学的ではない構成からなる都市を求めた<sup>(5)(6)(6)</sup>。

ベルギーにおいてもシャルル・ビュルス (Charles BULS) によって、形状と用途の調和が実現されていた古典主義以前の中世の特徴を有するピトレスクな都市景観を目指して、小さな改善の積み重ねによる都市保全が行われた<sup>(7)(8)(6)</sup>。

イギリスでは、ピトレスクという形容詞はピクチャレスク (picturesque) にあたるが、18 世紀のウィリアム・ギルピン (William Gilpin) によるピクチャレスク美学は、クロード・ロラン (Claude LORRAIN) 等の風景画が持つ不規則性

や過去への連想に新たな美を見出し<sup>(9)</sup>、フランス幾何学式庭園への反動からイギリス風景式庭園を生み出した。これは、ウィリアム・モリス (William MORRIS) の運動を通して、工業化社会を批判するキーワードともなった<sup>(10)(11)(7)</sup>。

一方、フランスでもオスマニズムに対する反発が起こり、1897 年、パリ市に建造物保全のための諮問組織である古きパリ委員会 (Commission du Vieux Paris、以下 CVP) が設立された<sup>(12)</sup>。CVP が、写真による記録のために設立した第三小委員会によれば、「古きパリ」とは、「ピトレスクな特徴を示す市の一部」とされた<sup>(13)</sup>。そこで、1916 年からの考古学的・芸術的目録 (Casier archéologique et artistique) 設置のための悉皆調査の際に、パリ生活者の視点から「ピトレスク」な景観を発見し、目録化した<sup>(14)</sup>。しかし、フランスにおける「ピトレスク」な景観の定義は他の国と異なり、単純に中世的なものではない。江口(2010)の研究により、19 世紀末から 20 世紀初頭は、フランスの歴史的環境保全制度の成立にとって、重要な期間であり、「ピトレスク」の概念が重要な役割を果たしたことが分かっている。しかしながら、この概念については、未だ日本・フランスにおいても十分に明らかになっていない<sup>(15)</sup>。

一方、ウジェーヌ・アジェ (Eugène Atget :1857-1927) は写真家であり、1897 年から「ピトレスクなパリ Paris pittoresque」及び「古きパリ Vieux Paris」というシリーズでパリのピトレスクな景観の撮影を開始した。1906 年から撮影した「古きパリの地誌 Topographie du vieux Paris」では体系的に地区ごとに主に古きパリの街路の写真撮影をし、CVP も写真を目録用に購入していた<sup>(16)</sup>。アジェの古きパリの地誌シリーズの写真を分析する事で、19 世紀末から 20 世紀初頭におけるパリのピトレスクに関する概念について明らかにする事ができると考える。

そこで、本研究ではアジェにより古きパリとして撮影さ

れた古きパリの地誌シリーズのうち、フランス国立図書館デジタルアーカイブに所蔵されている写真を対象として、19世紀末から20世紀初頭のフランスにおけるピトレスク概念についての景観特性を考察することを目的とする。

### (1-2) 既往研究と本研究の位置づけ

フランスのピトレスク概念<sup>(8)</sup>については、ほとんど研究されていない<sup>17) -19)</sup>。アジェについては、日本ではほとんど研究されていない。フランスでは、いくつかの写真集が出版され、人物像や目録等については、BORCOMAN(1984)<sup>20)</sup>、BUISINE(1994)<sup>21)</sup>、Direction des musées de France(1978)<sup>22)</sup>、BADGER(2001)<sup>23)</sup>などにより説明されているが、撮影した風景そのものに関する研究は見受けられない。また、2007年には国立図書館でアジェの展覧会「Eugène Atget」が開催された<sup>24)</sup>。以上より、本研究は日仏の景観概念研究において、新たな視点を提供することが期待される。

### (1-3) 研究方法

まず、上記の資料等を用いて、ウジェーヌ・アジェの人物像について明らかにする。まずは経歴について概観した後、撮影を行った写真コレクションについての整理を行う。

次に、フランス国立図書館のデジタル写真コレクション・古きパリの地誌シリーズ中のソルボンヌ地区を用いて、アジェの撮影していたピトレスクなパリの概念について分析する。対象地区はピトレスクな古きパリの代表的な景観である「古い建造物に囲まれた、サント・ジュヌヴィエーヴ山の急斜面<sup>(9)</sup>の素晴らしい歴史的景観」<sup>25)</sup>を有した。しかし、後述する大通り沿いのオスマニスムに付随した急進的近代化の波にさらされた為、アジェが1906年から「古きパリの地誌シリーズ」を撮影した際に真っ先に撮影を開始した地区であり、彼がピトレスクな古きパリの景観を扱うシリーズの中でも、対象地区を最も代表的な景観として捉えていたことが分かる。そこで、対象地区は概念の特徴把握と普遍化の対象として最適な地区であると言える。具体的には、1906年から1915年に撮影された古きパリの地誌シリーズを対象として、写真と地図を用いて主要視対象の景観特性の分析を行い、19世紀末から20世紀初頭におけるパリのピトレスクな概念について考察する。

## 3. ウジェーヌ・アジェに関して

### (3-1) 経歴

ウジェーヌ・アジェは1888年から写真の撮影を始めた<sup>26)</sup> <sup>20)</sup> <sup>(10)</sup>。CVP設立時期にアジェは上述の体系的な消え行く古きパリの写真撮影を開始するが、これはサルドウが消え行く家屋等を対象とすることを示唆したためである。これにより、アジェはオスマニスムの進展により消え行く古きパリの記録を意識するようになった。1906年から1915年まで、アジェは本研究で扱う3つ目の大シリーズ古きパリの地誌を撮影した。これには、600点以上が収蔵されている。撮影開始から最初の5年間では扱えなかった都市組

表1 デジタルアーカイブに所蔵の地区一覧

番号	地区名	番号	地区名
1	ソルボンヌ	14	アール・ゼ・メティエ
2	アンヴァリッド	15	サン＝ジェルマン・ローセロワ
3	オデオン	16	サン＝ジェルマン・デ・プレ
4	モネ	17	ノートル＝ダム・デ・シャン
5	アルスナル	18	ジャルダン・デ・プラント
6	レ・アル	19	アンファン・ルーージュ
7	アルシヴ	20	ボンヌ・ヌーヴェル
8	ヴィヴィエヌ	21	サン＝トマ・ダキン
9	ゲヨン	22	パレ・ロワイヤル
10	メル	23	ノートル＝ダム
11	サン＝タヴオワ	24	サン＝ジェルヴェ
12	ヴァルド・グラス	25	グロ・ケヨー
13	サン＝メリ	26	ヴァンドーム広場

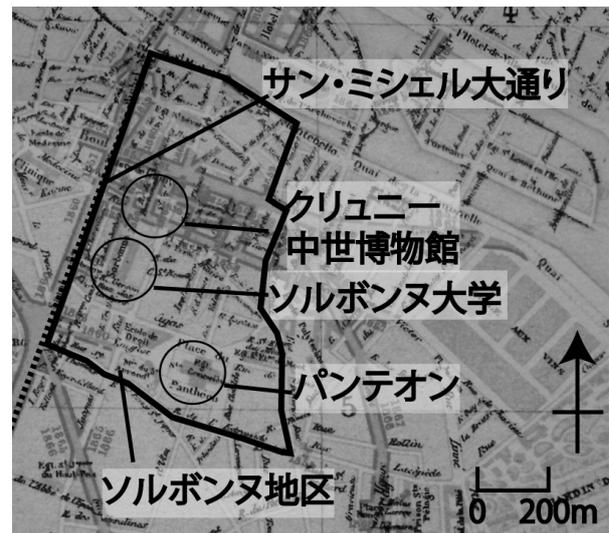


図1 ソルボンヌ地区概要 (出典: Paris en 1871, Bibliothèque historique de la ville de Paris, 1871に筆者加筆)

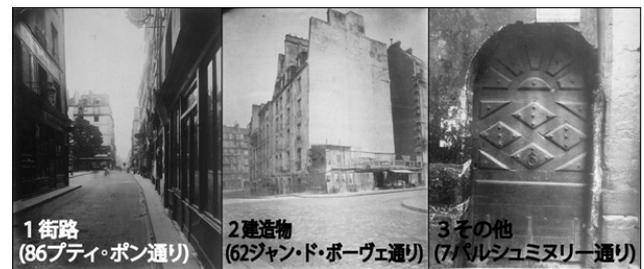


図2 大カテゴリーの分類例 (写真番号・撮影場所)

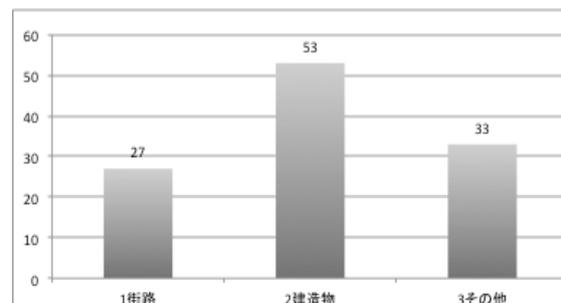


図3 大カテゴリーの視対象の属性

織を形成し、開発モデルとなる不規則な古い街路について、街路・地区ごとに体系的に撮影した<sup>21)</sup> アジェは、1906年

から1908年にかけて1区のパレ・ロワイヤル周辺のパリ右岸から撮影を行った。1909年には、5区ムフタル通り周辺の左岸地区を撮影し、1910年から1912年にかけて、6区のサン・ジェルマン・デ・プレ周辺及び、右岸のマレ地区周辺を撮影した。1912年からは4区のサン・ルイ島等その他撮影が不足していた地域について活動した。彼はこれらの写真をカーナヴァレ美術館や、パリ市歴史図書館、CVP等に販売した。

1920年には、美術学校校長であったポール・レオン(Paul LÉON:1874-1962)にアーカイヴの設立をもちかけた際に、アジェは「私は、全ての古きパリを所有していると言える」と述べている<sup>16)</sup>。そして、歴史的記念物委員会に2,621点の写真ネガを10,000フランで売却した。晩年には、公園やガラスについても撮影した。

### (3-2) 写真コレクションについて

1910年から、撮影したシリーズの写真を、小シリーズとアルバムに分類した。最終的に分類されたシリーズには、以下のものがあつた:①風景と文書、②古いフランス、③宗教的衣装と芸術、④ピトレスクなパリ、⑤古きパリの芸術、⑥古きパリの周辺、⑦古きパリの地誌、⑧パリの内装、⑨主に公園と庭園を扱ったもの。特筆すべきとしては、④ピトレスクなパリシリーズはパリの街路における人々の生活を扱っていた<sup>27)20)</sup> (11)。⑦古きパリの地誌は、体系的にパリの街路の様相と構造について撮影したものである。⑦古きパリの地誌について、国立図書館には、現在区及び地区ごとに分類された約3,200点が収蔵されている。これは、単純に1906年以降に⑦古きパリの地誌シリーズとして撮影された写真だけではなく、郊外も含む他のシリーズの写真も再編されている。

## 4. 景観分析

### (4-1) 研究対象地・ソルボンヌ地区について

古きパリの地誌シリーズとして、国立図書館デジタルアーカイヴ<sup>28)</sup>に分類・収蔵されている写真の中から、ソルボンヌ地区に分類されているものを対象とする。ソルボンヌ地区は、シリーズ初年度の1906年から撮影され、113点の写真が収蔵されている。アーカイヴには26地区が掲載されている(表1)。

ソルボンヌ地区はパリ5区で、ソルボンヌ大学を中心としてリュクサンブール公園の東側に学生街カルチュ・ラタンを形成している。クリュニー中世博物館のローマ時代の遺跡をはじめとして、バンテオン等遺産が多く存在しているパリ20番目の行政区でもある。一方、オスマンの街路事業であるパリ市への十字形幹線道路の開設(Grande Croisée de Paris)に付随して、サン・ミシェル大通りがこの地区を貫通し、大通り側の景観が大きく様変わりした地区でもあつた<sup>29)</sup> (図1)。

### (4-2) 視対象の特性

景観について、分析手法は、飯田(2008)他を参考とした<sup>30)</sup> (10)。まず視対象の特性について明らかにする。まず主

要視対象の要素の手がかりを写真の構図、写真余白のアジェによるメモ及びカメラのピントの合わせ方から抽出し<sup>(13)</sup>、大カテゴリー(1街路、2建造物、3その他)に分類した<sup>(14)</sup> (図2。)。まずはタイトルから街路を判断し、判断がつかない場合は、画面の中央または中央付近に大きくまたは目をひくよう撮影された対象を主要視対象とし<sup>31)</sup>、残りをその他とした。その結果、113点中、街路を主要視対象としているものは27点、建造物を対象としているものは53点、その他は33点見られ、建造物が最も多いことが判明した<sup>(15)</sup> (図3)。このことから、パリ市内の写真であるため、街路形状のみに留まらず、建造物そのものがアジェの興味の中心にあつたことが読み取れた。

次に、主要視対象について、大カテゴリー(1街路、2建造物、3その他)を細分化したサブカテゴリーに分類した<sup>(16)</sup> (表2、図4)。建造物はサブ大カテゴリーとして集合と単体に分類した。その結果、最も多かったものは扉で14件あつた。これは、ピトレスクなパリとして建造物の細部を撮影していたものが、古きパリの地誌シリーズに組み込まれたケースが多かつたためと考えられる。また、建造物を撮影した後、近づいて扉のみ撮影したものも多く見受けられた。続いて、多いものが住商混合の集合建造物で10件である。これは、特に目立ったランドマークや特異な建造物がない、パリの一般的市街地である住商混合地区をアジェが好んで撮影していたためと考えられる。次に多いものは、角地建築で9件である。これには、石造りの建造物の角に建設された、木造の家屋が多く見受けられた。次に多いものは、8件の幅員変化街路と工事であつた。双方は、オスマニズムの進展による街路の拡幅が進展していたことに由来する。

次に、副次的な視対象についても全てサブカテゴリーごとに列挙した(図5)。その結果、集合建造物の住商混合が51件と最も多いことが明らかになった。これは、上記の主要視対象としても出現しており、アジェの一般的な町並みに対する興味の表れであると考えられる。続いて多かつたものは、39件の街灯であつた。

これは、主要視対象としては2件のみしか確認されていないが、アジェが街灯について、町並みを際立たせる魅力的な景観要素として捉えていたことが伺える。さらに、樹が21件確認されたが、これは街路を撮影した際に写り込んだものが多かつた。これについても、町並みを際立たせる魅力的な景観要素として捉えていたことが伺える。

### (4-3) 視点場の立地に関して

次に、写真が撮影された視点場について、オスマニズム及び大街路・広場との結節の分類ごとで考察する<sup>(17)</sup> (表3、図6)。アジェはオスマニズム以前の古きパリの景観を撮影し、この地区の景観は裏の細街路と表の大街路や広場とのモザイク状の構成に大きく影響されているからである。最も多い属性は21の非オスマニズム街路で82枚であり、その内、大街路結節が8街路で40枚と最も多かつた。

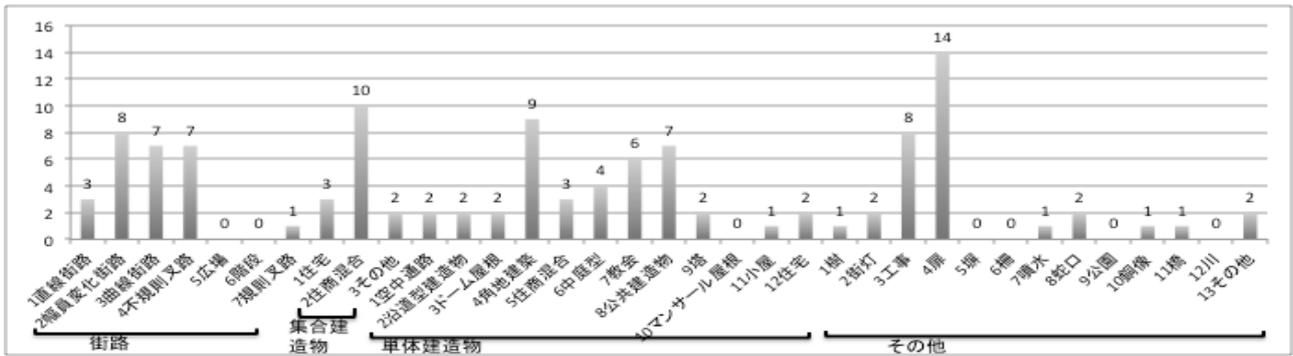


図4 主要視対象の分類

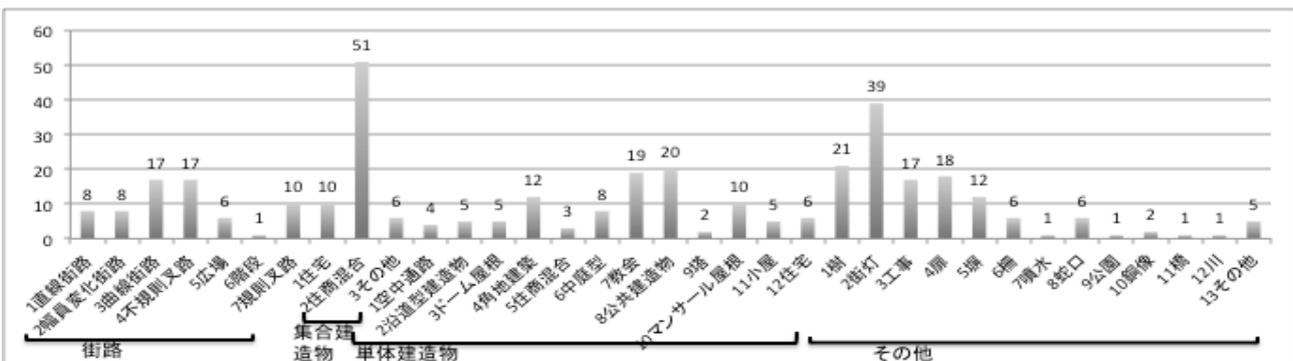


図5 全ての視対象による分類

表2 サブカテゴリーの分類例と判定根拠

	街路							建築物(集合)		建築物(単体)	
	1直線街路	2幅員変化街路	3曲線街路	4不規則交路	5広場※	6階段※	7規則的交路	1住宅	2住商混合	1空中通路	2沿道型建築物
根拠	主要視対象の街路が直線である。	主要視対象の街路の幅員が途中で変化している。	主要視対象の街路が曲がっている。	主要視対象が交路であり不規則な交わり方をしている。	主要視対象が広場である。	主要視対象が階段状の街路である。	主要視対象が交路であり直交している。	主要視対象が住宅で構成された町並みである。	主要視対象が住宅と店舗で構成された町並みである。	主要視対象がある建築物の一部の空中の通路である。	主要視対象が広場前面した単一の建築物である。
写真番号・撮影場所	100 サン・ジュリアン・ポール通り	32 グラン・デグレ通り	56 ガランド通り	31 フトブリー通り	20 サン・テディ・デュ・モン通り	27 アングル通り	63 ラノー通り	103 サン・ジュリアン・ポール通り	87 プティ・ボン通り	1 ピュシュリー通り	75 パンテオン広場
根拠	主要視対象がドーム屋根のある単一の建築物である。	主要視対象が角地に立地する建築物である。	主要視対象が単一建築物で住宅と店舗がある。	主要視対象が単一建築物の中庭である。	主要視対象が教会である。	主要視対象が学校等の公共建築物である。	主要視対象が塔状の建築物である。	主要視対象がある建築物のマンサール屋根である。	主要視対象が木造の小屋である。	主要視対象が住宅機能のみを持つ単一の建築物である。	
写真番号・撮影場所	2 ピュシュリー通り	4 ガランド通り	6 ガランド通り	10 プティ・ボン通り	20 サン・テディ・デュ・モン通り	21 クローヴィス通り	111 ヴァレット通り	36 ラグランジュ通り	23 モンターニュ・サント・ジュヌヴィエーヴ通り	45 クローヴィス通り	

表5 11種の景観の類型例事例と分析(※色付き字は同色線で写真・地図上に(地図は建物のみ)に示した)

大分類	街路			建築物							その他
景観	A 非オスマニスムの曲線	B 非オスマニスムの幅員変化	C 非オスマニスムの不規則交路	D 住商混合の町並み	E 特異な建築物	F 遠景の遺産	G 中景の公共建築物	H 角地の住宅	I 広場の沿道型建築物	J 工事	K 細部
写真例											
地図例											
分析※	ガランド通りは細街路であり、近景には幅員変化、中景は曲線街路となっており、近景には幅員変化がない景観である。	サン・ジャック通りは遠景にバス・ベイクティンがあるが、近景には幅員変化がある景観である。	中景にオスマニスムには存在しない不規則な交路があり、遠景にはアイストリップではないモニュメントがある景観である。	近景から中景に続く町並みは、オスマニスムの様式ではない住商混合の集合建築物で構成されている景観である。	近景から遠景に不規則な街路が走り、近景から中景に特異な建築物やドーム屋根等特異な建築物がある景観である。	細街路の近景に庶民の生活を表現する小屋があり、町並みの抜けから遠景に歴史的遺産を強調する景観である。	非オスマニスム街路から、中景に公共建築物がある景観である。近景に塔が見える。	非オスマニスム街路から、中景に角地の庭園付き住宅を確立する景観がある。庭園から木々を除いた教会も見える。	18世紀に建設されたパンテオン広場を構成する建築物の全貌を確立する景観である。	サン・ジャック通り沿いで行われた工事を中景に確立する景観である。背後にサン・セヴラン教会が見える。	マルスラン＝ベルトロ広場の蛇口やパンテオン広場のテオン広場の扉等、細部を写した写真である。

表3 オスマニズムと結節による視点場のカテゴリ

属性	結節	視点場名称	合計	図6の色
非オスマニズム街路 15m以上	a大街路(幅員15m以上)	la-1ビュシュリー通り(12), la-2ガランド通り(9), la-3バルシュミヌリー通り(6), la-4アングレ通り(3), la-5フブリー通り(1), la-6ダント通り(2), la-7ジャン・ド・ボーヴェ通り(1), la-8サン＝ジャック通り(6)	40	赤
	b広場	lb-1クロヴィス通り(6), lb-2ヴァレット通り(4)	10	橙
	c大街路・広場	lc-1カルム通り(2), lc-2ジャヌ通り(1), lc-3モンターニュ・サント＝ジュヌヴィエーヴ通り(6)	9	黄
	dその他	ld-1プティ・ボン通り(7), ld-2サン＝ジュリアン・ル・ボーヴ通り(6), ld-3サン＝ティエンヌ・デュ・モン通り(2), ld-4グラン・デグレ通り(1), ld-5ドマ通り(2), ld-6ラノー通り(3), ld-7ラプラス通り(1), ld-8ザシャリ通り(1)	23	桃
IIオスマニズム街路	c大街路・広場	llc-1ラグランジュ通り(3)	3	黒
III非オスマニズム街路	dその他	llld-1プティ・ボン通り(1), llld-2シャルティエール小路(1), llld-3サンプリエール小路(2)	4	青
IV非オスマニズム広場	a大街路	lVa-1バンテオン広場(9), lVa-2マルスラン＝ペルトロ広場(2)	11	黄緑
	c大街路・広場	lVc-1サント＝ジュヌヴィエーヴ広場(1)	1	緑
Vオスマニズム広場	a大街路	lVa-1モベル広場(3)	3	灰
VI非オスマニズム岸	a大街路	lVa-1サン＝ミシェル河岸(1)	1	水色



図6 視点場(●)の立地(点線は正確な位置が不明な視点場の範囲。凡例は表3参照) (出典: Plan de Paris, Bibliothèque historique de la ville de Paris, 1923に筆者加筆)

表4 視点場と主要視対象の関係(□は2枚以上の写真が存在するもの)

属性 ※表3参照	結節	視点場	主要視対象																										合計写真枚数						
			街路			集合建造物			単体建造物										その他																
			1直線街路	2幅員変化街路	3不規則街路	4階段	5障壁	6規則的支路	7住宅	8その他	1空中交通	2沿道型建造物	3ドーム屋根	4角地建築	5住商混合	6公共建造物	7教会	8公共建造物	9塔	10マンサール屋根	11小屋	12住宅	13樹	14街灯	15工事	16扉	17塀	18噴水	19蛇口	10公園	11橋	12川	13その他		
a	la	la-1ビュシュリー通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	12	
		la-2ガランド通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	
		la-3バルシュミヌリー通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	
		la-4アングレ通り	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	
		la-5フブリー通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
		la-6ダント通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
	b	lb-1クロヴィス通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	
		lb-2ヴァレット通り	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	4	
		lc-1カルム通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	
		lc-2ジャヌ通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	
		lc-3モンターニュ・サント＝ジュヌヴィエーヴ通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6	
		ld-1プティ・ボン通り	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	
d	ld-2サン＝ジュリアン・ル・ボーヴ通り	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	6		
	ld-3サン＝ティエンヌ・デュ・モン通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
	ld-4グラン・デグレ通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
	ld-5ドマ通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
	ld-6ラノー通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3		
	ld-7ラプラス通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
c	ld-8ザシャリ通り	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
	llc-1ラグランジュ通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3		
	llld-1プティ・ボン通り	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
III	llld-2シャルティエール小路	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
	llld-3サンプリエール小路	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
	IV a	lVa-1バンテオン広場	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	9	
IV	lVa-2マルスラン＝ペルトロ広場	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2		
	lVc-1サント＝ジュヌヴィエーヴ広場	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
V	lVa-1モベル広場	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3		
VI	lVa-1サン＝ミシェル河岸	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1		
合計写真枚数			3	8	7	6	0	0	1	3	10	0	2	2	9	3	4	6	6	2	0	1	2	1	2	8	13	0	1	2	0	1	0	3	106

続いて、その他結節が8街路で23枚であった。その他結節は街路の起点から終点まで細街路にのみ面している。上記は地区の北側に集中している。更に広場結節も2街路で10箇所撮影された。また非オスマニズム広場の大街路結節もほぼ同じ枚数を記録しており2広場で11枚となっている。このことから、視点場は非オスマニズム細街路から大胆に見通しが開けるもしくは細街路により周囲から視線が囲い込まれた場所、または広場と大街路で見通しが開ける場所に多く存在することが分かった。

(4-4) 主要視対象ごとの景観の特性に関して

表4では、街路・広場ごとの視点場から、主要視対象を集計し、2回以上の頻度で表れるものに関して抽出し、主要な景観11の特性について考察した<sup>(18)</sup>(表5)。

まず、街路に関して、景観AからCは、非オスマニズム細街路の近景から中景にサン＝ジャック通りの幅員変化やモンターニュ・サント＝ジュヌヴィエーヴ通りの不規則又路があり、遠景にガランド通りの曲線や教会が垣間見える景観となっている。また、建造物について景観Dではガランド通り、サン＝ジュリアン・ル・ボーヴ通りの住商混合の町並みが撮影されている。これらは非オスマニズム様式の当時の住民が生活した一般的な建造物であるが、古きパリの保全について先進的だったCVPにおいてもまだこのような境界の歴史的価値を殆ど評価していなかった<sup>(32)</sup>。従って、アジェは住民の当時の生活感が重視して撮影したと考えられる。景観EからFは近景から中景にガランド通りの角地建築など、町並みにおける特異な建造物があり、背後に不規則な街路や遠景の教会が見られる。街灯はEの様に近景に写し込まれ、建造物とともに町並みの特異点となる。

GからIでは中景から遠景にオスマニズム以前の建造物が臨まれる。Hにはオスマニズムにはありえない形で樹がのぞいている。これらは、いずれもオスマニズムによる都市の整序化と真逆の傾向が見られる。その他に関しては、Jではサン＝ジャック通りにおける工事が注目されているが、これは、都市更新の記録を残す意図であったと考えられる。Kは細部まで個性的な装飾に着目したものである。

## 5. おわりに

アジェの写真におけるピトレスク概念は、オスマンの都市改造に真っ向から対抗するものであった。オスマンのパースペクティブと対称性を重視した都市計画に対抗して、全近代の曲線や不規則な街路、オスマン以前の建造物から構成される近景・中景・遠景で変化に富む景観を好んだことが明らかになった。街灯や樹は町並みの特異点としてこれを助けた。更に単純な中世的景観ではなく、境界の生活感を重視し、扉等に代表される細部まで生き生きとした個性的な建造物が存在するパリの求めていたことが明らかになった。今後、アジェの他地区の写真について研究を遂行し、更にアジェのピトレスク概念の傾向について探る必要があると考えられる。

### 補注

(1) ①機能性・合理性を獲得すること、②道路の整序に美意識を取り入れること、③都市改造を一つのプロジェクト事業とする。(2) ロマン主義の時代から「絵画に関して、直線、光と影の乱暴な対照から生じたもの」という意味を持っていた。(3) ルネッサンスの古典的な建築に対する、「バロック建築の本質的な特徴」であった。(4) すなわち、不規則性に対する規則性、曲線に対する直線、ピトレスクさに対する幾何学性となった。(5) ジッテは、幾何学的な近代のシステムに反発し、欧州で中世的な不規則性を内包する、ピトレスクな都市景観が指向された。ドイツ語でピトレスクは *malerisch* でジッテは1889年の『芸術的原理に基づく都市計画』において頻繁に使用している。(6) ビュルスは、1893年の『都市美』において、「古い都市が新しい都市に変わると、私たちはそこにあったピトレスクな景色が失われる」とも述べている。(7) その後、工業化社会へのアンチテーゼとしてのピクチャレスクさが、不規則性や過去への連想を促す都市計画として、ジッテに影響を受けた田園都市開発の推進者レイモンド・アンウィン (Raymond UNWIN) により田園都市において実現された。1909年に計画理念をまとめた『*Town Planning in Practice*』を出版した。曲線及び多様な街路の幅、そして不規則な角を持つ広場にピクチャレスクな風景が生まれると、アンウィンは分析した。(8) 小倉(1995)はアドルフ・ジョアヌ (Adolphe JOANNE) が案内書内で風景の価値を決定づけるために「ピトレスク」という言葉を用いたことを明らかにした。仏文学ロマン主義はCOLLOT(2005)らにより研究されているが、風景については殆ど研究されていない。TORIUMI(2001)は、オスマニズムの「横領」によって、ピトレスクな都市形態が生み出されたが風景とならなかったことを明らかにした。(9) パンテオンの丘を中心としたソルボンヌ地区である。(10) 1857年2月12日にアキテーヌ地方のリブヌに生まれた。1879年に国立音楽・演劇学校に入学しその後、喜劇役者となったが、大きく成功しなかった。アジェははじめ風景や植物の撮影をしていたが、次第に首都の遺産に興味を持つようになった。そして、ピトレスクなパリ:市場・街路景観・古きパリの風俗、及び古きパリ(都市生活):地形を感じる眺め・建築の細部の大きく2つのシリーズの撮影をした。ピトレスクなパリは、1898年から開始され、1910年に再開された。1892年には彼は自らの作品について「風景、動物、花、記念物、文書、アーティストへの最初のプラン、絵画の複製、移動である。コレクションは商用ではない。」と述べている。1897年にCVPが設立されたが、設立時のメンバーである画家エドゥアール・ドテユ (Edouard DETAILLE) と劇作家ヴィクトリアン・サルドウ (Victorien SARDOU) は、アジェの古くからの知人であった。1901年からは、ファサードの装飾の撮影を開始した。その他、公園、記念物なども撮影した。郊外についても、古きパリの芸術シリーズの周辺という新しいシリーズとして撮影を開始し、ヴェルサイユ等から撮影を始めた。(11) ①風景と文書は風景や自然を扱い、⑤古きパリの芸術は装飾や細部を扱っているが作品のモチーフのために撮影された。⑥古きパリの周辺は、⑤古きパリの芸術の郊外版である。なお、1910年以降に開始された④ピトレスクなパリシリーズ360点は、販売のため、以下に分類された看板と古い店舗、パリの車、20世紀初頭の芸術的・ピトレスク・ブルジョワ的なパリの内装、古きパリの芸術。各シリーズは約60点ずつある。歴史的記念物委員会には、④ピトレスクなパリ、⑤古きパリの芸術の一部が収蔵された。(12) ソルボンヌ地区は劇的な地形変化が写真に影響を与えている事例

が見受けられなかったため、地形に関する分析は行わなかった。(13) 写真の構図の読み取り方及びピントの合わせ方からの写真家の表現意図の汲取りについては、写真家・香山麻理子氏に助言を仰いだ。(14) 街路の大カテゴリーについては、建造物が写っているが、街路形状そのものを表現する意図が存在する写真とした。(15) 写真番号はコレクションの並び順にふった番号である。(16) 表2では集合建造物のその他の例示は省略した。(17) 図面上には、位置が確認できなかったものに関してはプロットしていない。非オスマニズム街路とはオスマン化の影響以前から存在していた街路を示す。結節とは街路等がある対象に接続していることを示す。(18) 写真例は、順にA:3 ガランド通り、B:89 サン・ジャック通り、C:74 モンターニュ・サント=ジュヌヴィエーヴ通り、D:5 ガランド通り、E:4 ガランド通り、F:33 ビュシュリー通り、G:41 クローヴィス通り、H:45 クローヴィス通り、I:75 パンテオン広場、J:91 サン・ジャック通り、K:マルスラン=ベルトロ広場である。

### 参考・引用文献

1) 松井道昭(1997), 『第二帝政下のパリ都市改造』, pp.148-156, 日本経済評論社, 2) 田中暁子(2008), 『ポスト・オスマン期のブリュッセルにおけるシャルル・ビュルスの都市美理念とその実践に関する研究』, pp.20-30, 東京大学学位論文, 3) REY, Alain. et al. *Le nouveau petit robert de la langue française*, Paris, Le Robert, 2009, 4) MERLIN, Pierre. et al. *Dictionnaire de l'urbanisme et de l'aménagement*, Paris, Presses universitaires de France, 2009, pp.635-636, 5) 江口久美(2011), 『1890年代から1930年代の古きパリ委員会による歴史的環境保全に関する研究』, pp.42-57, 東京大学学位論文, 6) SITTE, Camillo. (1983), 『広場の造形』, 大石敏雄訳, p.10, p.24, p.65, p.69, p.124, p.126, pp.128-132, p.157, 鹿島出版会, 7) 田中暁子(2005), 『ベルギーの都市美運動』, 『都市美』, pp.118-132, 学芸出版社, 8) 田中暁子, 前掲注釈2, p.102, 9) GILPIN, William. *An essay upon prints; containing remarks upon the principles of picturesque beauty; etc*, London, J. Robson, 1768, 10) 西山康雄(1982), 『R.アンウィンの敷地計画の技法について』, 『日本建築学会論文報告集』, 第313号, pp.96-104, 日本建築学会, 11) UNWIN, Raymond. *Town Planning in Practice*, London, T. Fisher Unwin, 1911, p.12, p.52, p.98, p.104, p.126, p.138, p.154, p.215, p.249, p.254, p.259, p.270, p.317, p.346, p.368, p.393, 12) 江口久美(2010), 『20世紀初頭の古きパリ委員会による歴史的記念物保全への都市的視点の導入に関する研究』, 『都市計画論文集』, No.45-3, pp.355-360, 日本都市計画学会, 13) Commission du Vieux Paris, *Procès-Verbaux fasc.1*, Paris, Imprimerie Municipale, 1899, pp.1-5, 14) 江口久美, 前掲注釈5, pp.138-154, 15) 江口久美(2011), 『パリの都市景観におけるピトレスクの意味に関する研究』, 『日本建築学会学術講演梗概集F-1分冊』, pp.411-412, 日本建築学会, 16) ORLAN, Pierre Mac. « *Un oeuvre et loyal avant tout* », *Atget Paris*, Paris, HAZAN, 2000, pp.9-19, 17) 小倉孝誠(1995), 『19世紀フランス夢と創造』, pp.64-109, 人文書院, 18) COLLOT, Michel. *Paysage et poésie du romantisme à nos jours*, Paris, José Corti, 2005, pp.21-42, 19) TORIUMI, Motoki. *Les promenades de Paris de la Renaissance à l'Epoque Haussmannienne*, Paris, Thèse de l'HESS, 2001, pp.769-827, 20) BORCOMAN, James. *Eugène Atget*, Ottawa, Galerie nationale du Canada, 1984, pp.16-31, 21) BUISINE, Alain. *Eugène Atget ou La mélancolie en photographie*, Nîmes, J. Chambon, 1994, pp.13-24, pp.35-46, 22) Direction des musées de France. *Eugène Atget*, Paris, Inspection générale des musées classés et contrôlés, 1978, 23) BADGER, Gerry. *Eugène Atget*, Paris, Phaidon, 2001, 24) Bibliothèque nationale de la France, "Eugène Atget", フランス語, 入手先 (<http://expositions.bnf.fr/atget/index.htm>), (参照 2012-04-23), 25) DEBIDOUR, Elie. *La conservation du vieux Paris et l'urbanisme*, Paris, Musée social, 1945, pp.4-11, 26) Bibliothèque nationale de la France, J BALDER, Jean-Marie., "Qui est Eugène Atget (1857-1927) ?", フランス語, 入手先 (<http://expositions.bnf.fr/atget/arret/01.htm>), (参照 2012-04-23), 27) Bibliothèque nationale de la France, LE GALL, Guillaume, "Le travail de la collection : l'ordre et le classement, les séries", フランス語, 入手先 (<http://expositions.bnf.fr/atget/arret/01.htm>), (参照 2012-04-25), 28) Bibliothèque nationale de la France, Bibliothèque nationale de la France, "[Le quartier de la Sorbonne] / Eugène Atget, photogr. Atget, Eugène ...", フランス語, 入手先 (<http://gallica.bnf.fr/ark:/12148/btv1b31000432/>), (参照 2012-04-28), 29) 田中暁子, 前掲注釈8, p.18, 30) 飯田晶子ほか(2008), 『幕末・明治期の横浜旧居留地・外国人遊歩道における文化的景観に関する研究』, 『都市計画論文集』, No.43-3, pp.541-546, 日本都市計画学会, 31) 神谷文子ほか(2000), 『主題要素の映され方からみた都市景観写真の構図に関する研究』, 『日本建築学会計画系論文集』, 第528号, pp.179-186, 日本建築学会, 32) 江口久美, 前掲注釈14, pp.115-119

(2012年5月1日 受付)